

今までに学んだ書物は？

2023年～

「巡礼歌 講解説教 詩編120—134編（含私訳）」 牧野信成著

本書は、現在、日本キリスト改革派佐久長野教会牧師である牧野信成先生が、神戸改革派神学校教授であった時、当時、無牧であった改革長老教会霞ヶ丘教会での毎月1回の礼拝説教奉仕で行った一連の説教をまとめたものです。本書で説教されている詩編120編から134編までの15の詩編は、「都上りの歌」と呼ばれ、祝祭のためにエルサレムにある神殿に上って行く巡礼者たちによって歌われた「巡礼歌」と言われています。しかし、著者が指摘しているように、「巡礼とは、神に向かって旅に出ること。人生の旅路にも喩えることができます」。私たち信仰者の人生も天国に向かっての巡礼、キリストが再び来られる終末的神の国の完成に向かっての巡礼です。そういう意味で、本書は詩編の「巡礼歌」の学びを通して、巡礼者である私たち信仰者に、大きな励ましと慰めを与えてくれます。また本書は、私たちの巡礼の旅であるこの世での信仰生活の意義を改めて教えてくれます。

2021年

「神さまと共に歩む道『子どもと親のカテキズム』解説」 牧田吉和著

本書は、2014年に日本キリスト改革派教会大会教育委員会より出版された「子どもと親のカテキズム」の解説本です。著者は、神戸改革派神学校の校長を長く務めた牧田吉和先生です。「子どもと親のカテキズム」は、教会の子どもたちの信仰教育のために書かれたカテキズムであると同時に、その子供たちを導く親や教会学校教師のためのカテキズムでもあります。そして、その特色はウェストミンスター小教理問答とハイデルベルク信仰問答の両方の良い点を取り入れている点、また、今までのカテキズムでは十分に触れられていなかった、この世界の中での教会の使命や社会的責任・文化的使命についても神の国の視点から語っている点です。その「子どもと親のカテキズム」の内容について分かり易く解説しているのが本書です。教会学校での学びだけでなく、教会員の教理教育にも非常に役立つ本です。

2019年～2020年

「ただ一つの慰め『ハイデルベルク信仰問答』によるキリスト教入門」 吉田隆著

本書は、世界の改革派教会の多くが教会の信仰告白としているハイデルベルク信仰問答について、その日本語の訳者でもある著者（現神戸改革派神学校校長）によって書かれたハイデルベルク信仰問答の解説本です。もともとは、北米キリスト改革派教会メディア伝道局の日本語部門であるCRCメディア・ミニストリーの月刊誌「ふくいんのなみ」に2008年から2014年まで掲載された「ただ一つの慰め—『ハイデルベルク信仰問答』の学び」を一冊にまとめたものです。ハイデルベルク信仰問答を通して、キリスト教信仰の教理の基本を学ぶのにとても良い本です。

2019年

『キリスト者から見る「天皇の代替わり」』 「教会と政治」フォーラム 編

今年の5月1日に天皇の代替わりが行われました。これに関して行われる儀式等には「日本国憲法」の理念とは異なるものがあることが指摘されています。この書物ではキリスト者の立場からその問題点を指摘されています。日本において政教分離、信教の自由について考えるための学びです。弓矢健児牧師も執筆者の一人です

2019年

『わが故郷は天にあらす』 ポール・マーシャル著 キリスト教の有神論的世界観に立つキリスト者の生き方について具体的な問題を取り上げ、著者の体験等にも触れながらわかりやすく語ってくれています。この本の題名は、キリスト者の目標がただ救われるということにあるのではなく、救われた者は現実の世に遣わされその中で神の民として生きるべきことを訴えています。すなわち、「私の故郷は天にある」というのではなく、この世にあるキリスト者の役割について教えてくれています。

2018年8月～

『キリスト者の世界観』 ウォルターズ著

聖書の教えに基づくキリスト教の有神論的世界観について現代の問題にも触れ説いています。神の創造から終末に至る、創造、人間の堕落・罪、罪からの救済史、再創造、世界の完成への道、完成の時としての終末について学び、その中で歩む人間あり方を考えました。

